

“人間の味” 抹茶

永田和弘 S41.3

免に角、寒い日でした。私の大学教養時代も末に迫った十二月の事でございます。私は言いようのない孤独と不安の中を“人間”を求めて歩いて居りました。ある方にはこれだけ述べただけでその時の私の状態がお判りになるかも知れません。また経験されてない方には“異常心理”又は“精神異常”として読まれればこれから先の話が納得されるのではないのでしょうか。日常生活に於て我々は種々な不安や恐怖を憶えますがこの“原因なき不安”“原因なき恐怖”程恐しい物はありません。あの時の私は唯“人間らしい人間と話がしたい”そのみをこの恐怖からの救済として“人間”を求めて歩いていたのでございます。高ぶった私の神経は折しも降りしきる雪に敏感に反応して、疲労困憊していた私を更に萎縮させていました。私はその日既に三つの禅寺を回っており、ある寺では断られ又ある寺では失望しあと残る二つの寺に足を向けていたのでございます。京都五山。一つ一つを巡ってまで“人間”を探しに歩いたとは余程“人間”に飢えていたのでございましょう。断られる度に又失望する度に私を相手にしてくれる“人間”の数少なから孤独感、疎外感が高まり建仁寺では数本の木がつけている赤々と燃える火にさえ無限の暖かさを身に染みて味わったのでございます。その私に門を開けてくれたのは相国寺でした。あの恐しい不安の時代を忘れようと努めて一年余。私は相国寺でお世話になった方々の名前も住所も全て忘れ又焼却してしまいました。唯私の心に残っているのは禅師の立てて下さったお茶の味だけでございます。抹茶の経験は幼少の頃からありますがこの時程茶の持つ味を感じた事はありませんでした。よく禅と茶とが並べて引き合いに出されますが禅に比べてこの茶の何と和やかな事。警策杖を受けてありがたく目をうるませた事もあります。その警策杖を与える僧とそれを合掌して受ける自分との心の結び付きを、お茶の場合は何と判り易く、実感として暖かく与えてくれる事でしょうか。私はそれから数回相国寺へ足を運びましたがその時の私が望んでいる事と申しましたら先述の通り真に“人間”と“人間の心の交流”-----そこにあつたのでございますから、私は座禅を組む事を止めました。自分が相手であり、自分を掘り下げる事によって世界を見る座禅よりも、亭主が立てる茶を客が飲むその心の交流を楽しむ茶の方が私には魅力でございました。尤も、座禅と申しましても一年余り、茶もやっとな飲み方のみ憶えたばかりの弱輩故に、座禅の意味、茶道の真髓を言い当てたとは思いませんが今の私、お茶を立てて頂きそれを飲む時の心のつながり、又立ててそれを飲んで頂く時の喜びが楽しくて茶道に身を投じている次第でございます。私にとってお茶は“あの時の禅師の味”“人間の味”でございます。

終わり

この文章は私が専門過程の2年生、つまり大学4年次のときに坂上宗也先生の清和会でお茶を習っていたときに、会誌の掲載されたものである。